

4. 5 そだつ：アンケート抄：Q 私の人生儀礼体験

Facebook & twitter 「とある民俗学講師（の補足メモ）」

- ・テクニカルな問題（締切、タイトル表記、文章は添付ファイルではなくメール本文で！）
- ・内容上の問題（箇条書きではなく文章化すること、TPOを明記すること（とくに地名！）、挨拶は不要）
- ・「やったことがない」「通過儀礼を『経験』していない」はずはない
- ・「通過儀礼」／「儀礼」ではない「通過」／「通過」ではない「儀礼」／副次的に「通過儀礼」

【儀礼的捨て子】自分の体験ではないが、地元（京都府八幡市）では、女の子が生まれた際、四つ角に置いて帰る風習がある。置かれた子供は周囲の人間の助けを借り、どうにかして自分の家に帰る。周囲の人に聞いてもこの風習の理由はわからないが、自分が考えるに、赤不浄の考えが根底にあると思う。

【お宮参り】生まれて31日目経った時、宮参りに行ったのは愛媛県今治市、しまなみ海道の途中にある大三島にある大山祇神社である。両親いわく、12月の終わり頃だったのでとても寒かったそうだ。大山祇神社は山の神であり大海原の神、渡航の神を祀っていて、幅広いご利益があるため行ったそうだ。

【満月酒】中国では、生後1カ月を迎えた赤ちゃんの成長を祝うために「満月酒（まんげつしゅ）」というお祝いを行い、親戚や友人を招いて盛大に祝います。私の故郷である東北地方では、特別な儀式として、家族の中で最も年長者が箸で白酒（パイチュウ）をすくい、それを赤ちゃんの舌に少しだけつけて、健やかな成長と幸せを願います。この風習はもともと、赤ちゃんが無事に生まれて生き延びたことを祝うための儀式でしたが、今ではほとんどの場合、お年寄りが赤ちゃんをお酒でからかって遊ぶ微笑ましい習慣となっています。

【お食い初め】生後一〇〇日、徳島県三好市にある母の実家でお食い初めを行った。料理は母方の祖母が準備してくれた。鯛の尾頭付き、赤飯、お汁、野菜の煮しめ、ほうれん草のピーナッツあえ、お餅を食べた。養い親は本来祖父が行う慣わしがあったが、他界していたため祖母に行ってもらった。

【選り取り】二〇〇七年、愛知県瀬戸市の祖父母宅にて、一歳の誕生日だったため選り取りをした。和室に集まり、私の両親、父方の祖父母、父の姉夫婦と2人の子供である、まだ生まれて間もない従兄弟がその場にいた。私は広い和室で祖母の膝に乘せられていた。目の前の小さなちゃぶ台に一万円札、千円札、ペン、ハサミ、タコ糸が用意されていた。写真の中で、私は一万円札を手にしてしたが、おそらく祖母に持たされただけである。

【泣き相撲】二〇〇七年秋頃、兵庫県西宮市の越木岩神社で「泣き相撲」というものをやりました。神社のHPによると、健康祈願にあたるもので、年齢としては3歳までの行事。親に聞いたところ、相撲取りのような人に抱きかかえられて、ハッケヨイで相手の子供とどちらが多く泣いたかを勝負するというものらしいです。自分が1歳の頃のことなどほとんど記憶に残ってはいないですが、これは強く覚えています。よほど怖かったのだらうと思います。

【ひょうげまつり】当時通っていた香川県高松市の小学校では、3、4年生になると必ず「ひょうげまつり」に参加した。昔、ため池を作って水不足を救った平六さんという人物について学校で事前学習し、祭りの当日は、顔にカラフルな模様を描き、神社から平六さんが作った新池まで練り歩く。大人たちは神輿を担いだり、練り歩く。かなり大きな行事であり、この祭りを通して、普段関わることのない地域の人々と関わり、地域の伝統や歴史に触れ合うことになる。

【十三祝い】沖縄県那覇市で小学5年の冬に十三祝いをした。沖縄では数え年で13歳を迎える節目に十三祝いを行う。近年、県内の小学校の学校行事として十三祝いを行うことが多い。七五三のように写真館で記念写真を撮ったり、親戚一同集まってお祝いしたりする家庭もある。琉舞を習っている児童によるお祝い事の定番「かぎやで風」を踊り、会は始ま

った。児童や教師によるお笑いやダンスなどの出し物があり、私は友人と一緒にダンスを披露した。また、幼少期から現在までのスライドショーもあり、自分や友人の成長や変化を感じた。給食では、祝い膳として琉球料理が提供された。

【十三参り】京都・嵐山の法輪寺で十三参りをした。好きな漢字を筆で書き、橋を渡る際に「振り返るな」と言われたことが印象に残っている。しかし、私にとってより重要だったのは、曾祖母、祖母、叔母、姉、従兄弟などの代々の女性の親戚が同じ振袖で十三参りをしてきたという家族の慣習である。その振袖に袖を通すとき、自分が「一人前の大人」として、そして「家の一員」として正式に受け入れられたように感じた。

【卒業式】私は奈良県の明日香村で育ちましたが、村には小学校・中学校がともに1つずつで、転入や転出がない限り、生徒のメンツは変わりません。しかも、幼少中一貫教育という取り組みをしていたことで、中学校の先生が小学校で授業をするということもしばしばあり、先生方の顔ぶれもさほど変わりはないという感覚でした。そんな中での小学校の卒業式だったので、全員が「このまま何も変わらずに中学校進学やん」という感じで、全く動じず、涙も流さず、クロッとしていました。本来感動あり涙ありの卒業式が、サラッと終わったのが、非常に印象に残っています。

【初潮】中学1年の時、初潮がきた日に当時住んでいた家でお赤飯を食べました（神奈川県横浜市）。

【受戒】私が通っていた清風南海中学校・高等学校（大阪府高石市）では、仏教を教育に取り入れていたため、中1と高1は4月に高野山の金剛峯寺で受戒を受け、仏門に入り、仏に帰依することを誓約し、十善戒を唱えていました。学校の先生によれば、入学式ではなく受戒を経て初めて入学したことになるそうである。当時はよく分からないまま終わったが、今から思えば他ではあまり体験できない貴重な機会であったように感じる。

【立志式】私が通っていた中学校では毎年2月中旬、中学2年を対象に「立志式」が行われている。幕末の志士・橋本左内の『啓発録』を全員で読み合わせたり、一人一人が大人になっていく今の想いや決意を作文にまとめて発表したりした。私は、当時最も力を入れていた部活動において、最高学年として後輩を導く立場になり、結果が求められる中、「大人」としての自覚を持つ必要があることを強く感じた（薩摩川内市）。

【成人式】私は大阪市の生野区に在住しており、この地域の成人式に出席した。特徴的なのは、韓国・朝鮮の民族衣装であるチョゴリを着て出席している女子の数が非常に多いことである。私の友人も三分の一ほどの数の女子がチョゴリで出席しており、そのうち三人の友人のチョゴリは韓国で仕立てたものということであった。その友人は、「これからもコリアンとして生きていく。だからチョゴリで来た」と話をしてくれ、彼女の中学時代からの仲良しグループは全員同じ考えでチョゴリを着て来ている、と教えてくれた。この地域の成人式は韓国・朝鮮人、日本人、そして近い将来どちらかの国籍を選択しなければならない人たちにとって自分のアイデンティティを明確にするはたらきを担っている。

【口頭試問】卒論の口頭試問は谷観きは似たような通過儀礼であるように感じました。所属していた工学部電気学部の卒論の口頭試問(2024年度)は、指導教員が許可を出した卒論に関するものなので、発表さえ行えばまず落とされることはない(≒命綱を握られている)のですが、自分たちよりはるかに知識の深い先生方を前に臆さずに発表・質疑応答をできること(≒勇気)を示すことで、学士(≒大人)として認められるという側面があると考えます（京都市）。

【内定式】日本の会社では10月1日に内定式を行うのが一般的で、東京都台東区にある私の会社もそうだった。これは内々定であったものを内定にすることを表す儀礼らしい。会社の人事曰く、内定になったことでこの会社の人間として責任感が伴うのだそうだ。内定式では、内定通知書を授与され、内定承諾書にサインをする。中には2026年3月までに大卒になることが記載されている。つまり、単位を落とすと仕事なくなるわけで、内定式を学期の頭に行うことで、危機感を持たせようとしているのかもしれない。その後は内定者で懇親会をして終わりであった。